

---

# 曖昧問答

ただ書く人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

曖昧問答

### 【著者名】

ただ書く人

### 【Zマーク】

Z8286Y

### 【あらすじ】

気づいてくれればいい。

男子学生と女子学生の曖昧な気持ちと曖昧な言葉。

会話文のみで書いてみました

「たんたんとショートショート」というサイトに掲載済みの作品です

「ねえ、地球が丸いって知っているかしら」

「もちろん知っているけど……」

「どうして」

「それが普通だと思つたけど……。学校でいつも畠つたし、宇宙から撮つた写真を見たこともあるし……」

「それなら自分で気づいたわけじゃないのね」

「ああ、うん」

「海に行つた」とはあるかしら

「もちろん」

「砂浜とか岬の崖の上とかどこでもいいけど、そこから水平線を見た時に地球は丸いなあって思つたかしら」

「うん、思つたよ」

「でも先に地球が丸いことは知つていたんでしよう。知らなかつたらどうかしら。もしかして地球は丸いのかなって気づくかしら」

「どうだろ。おれは何も気づかないんじゃないかな」

「わたしもそう思う。川上くんは気づかないだろしね、わたしも気づかないと思う。じゃあ、わたしのことばどつ思つかしら」

「え。わたしのことばどつ思つかしら」

「わたしの顔はどうかしら」

「丸いかつてことかな。まんまるではないけど丸顔な方だと思つよ」

「そうね……。わたしもそう思う。川上くんはどうしてわたしが丸顔つて気づいたのかしら」

「そりや、いつも見ているし……」

「いつもわたしを見ているの」

「そういうことではなくて、大学に来ればいつも顔を合わせただるう」

「ええ。……それなら顔を見れば丸顔かどうかわかるってことね。

じゃあ、鏡がなかつたらわたしはわたしの顔が丸顔だつて一生氣づかないのかしら」

「さあ。どうだろう。池とか水たまりだとで氣づくかもよ。もしかしたら誰かが教えてくれるかもしね」

「そうね。教えてくれればわかるのよね……」

「丸顔が嫌なのかい」

「いええ、自分の顔は好きよ。川上くんは好きかしら」「矢島さんの顔のことかい。それとも自分の顔のこと

「どっちでもいい」

「え、まあ、嫌いじゃないけど……」

「わたしの」とかしら」

「いや、うん」

「どっちなの」

「……両方嫌いじゃないよ」

「嫌いじゃないつて曖昧よね……。曖昧といえば、さつやの水平線なんだけど、水平線を見て空いつて何だろ? いつて思つた」とはあるかしら

「ああ、なんとなくそつと思つた」とはあるなあ

「空いつて何だと思つの」

「空氣、いや、大氣かな。違うか?」

「そつだと思う。大氣圈つてこいつじゃない。わたしは空いつて宇宙だと思つんだけじ、空は大氣圏で、大氣圏の向ひつを宇宙つてこいつらしいわよ」

「でも田に見える境界があるわけじゃないし、宇宙でもこいつじゃないかな。詳しいことはおれもわからないな」

「境界は見えないけど空は見えるじゃない。それなのにわからない」ともあるのね」

「そつだね。見えてもわからない」とまたぐさんあると黙つよ」

「じゃあ、川上くんは女の子と喫茶店に来たことはあるかしら」

「ああ、今までなかつたな。今日が始めてだ」

「わたしも今日が始めて。喫茶店にふたりでいるわたしたちって恋人同士に見えるのかな」

「え。どうかな。そう見える人もいるかもしれないけど、わからないな」

「そう……。それなら、わたしたちが見えていたのにわたしたちの関係がわからない人がいるってことね。ユキと田代くんはどうかしら。あのふたりが喫茶店にいたら恋人に見えると思う」

「それも同じじゃないかな。そういう人も思わない人もいると思うよ」

「わたしたちもユキたちも同じってことね。でも、わたしたちはユキたちがお互いの恋人だつてわかるわ」

「そりや、ふたりを知っているからね」

「それはどうして知っているのかしら。学校で習わないし田で見てもわからないじゃない」

「おれは確かに田代に聞いたんだけど……。まあ、そうでなくともなんとなくわかつたけどね」

「どうしてかしら。ユキと田代くんが喫茶店にいても恋人に見えるかどうかわからないんでしょう。それなのにどうして川上くんはなんとなくわかつたのかしら」

「なんとなくだよ……。ともだちだから、じゃないのかな。近くにいれば気づくというか……」

「近くにいれば他の人が気づかない」とも「気づく」とあるのね」「そうだと思いますよ」

「わたしたちもともだちでしょ。いつも顔を合わせる川上つき川上くんも言ってたし、近くにいるわよね」

「ああ、うん。そうだね」

「それなのにわたしは川上くんが四限の授業があるかどうかも知らないわ」

「そりや、知らないこともあるだろ。四限はないよ」

「わたしも四限はないわ。でも三限も四限もないのならどうして学

食にいたの

「いつもそうしているよ。外より学食の方が安いから。矢島さんこそ水曜はいつも一限が終わったら帰っているのに、今日はどうして学食に来たんだい」

「なんとなく」

「曖昧だね」

「うん。いつもは帰つてご飯を食べるんだけどね、今日はなんとかなの。お昼もいつしょで、こんなところにまで誘つて、迷惑だつたかしら」

「まさか。むしろうれしいよ。バイトもないし、帰つてもやる」とはないからね」

「よかつた。それならついでに夕食まで誘つてもいいかしら」

「いいね。田代たちも呼ぶかい」

「え……。うん。どっちでもいい、かな」

「よし。メールを送つておう」

「あ、やつぱり、やつき一限のあと、コキと田代くんいつしょだつたし、邪魔したら悪いかも」

「そうかい。うん、そうだね。他に誰かいるかな」「無理に誰かを誘うこともないんじゃないから」

「まあ、そうだけじね……。どこに行こうつか。ファミレスでいいかな。居酒屋でも行くかい」

「わたしはちょっと飲みたいかな」

「じゃあ、そうしよう」

「川上くんは結構お酒強いよね」

「そんなことないと思うよ。酔わないだけで、みんなで飲んだ時も家に帰つてから気持ち悪くなったりするしね」

「酔わないのがうりやましいわよ。わたしなんてすぐに酔つちゃうのも」

「女の子はそれくらいの方がいいだろう」

「男の人って自分のお酒に付き合ってくれる女の子の方がいいんじ

やないの」

「人それぞれじゃないかな。おれは別に酒好きってわけじゃないしないな」

「それならいいけど……。あ、お父さんもお酒に強いのかしい」

「うちの親父かい。親父は毎晩飲むタイプだし強いんじゃないかな。いつしょに飲んだことがほとんどないから、わからないけどね」

「そりゃ、家族でもわからないことがあるのね。お母さんはどうなの」「母親は飲めないわけじゃないけど弱いよ。コップ一杯のビールで酔つ払うって前に言つてたし」

「じゃあ、わたしと回じかしら」

「矢島さんより弱いと思つよ」

「そう。でも良かつた」

「何が良かつたの」

「何でもない。ねえ、お母さんのことは好きかしい」

「え。母親かい。どうだろ？ 嫌いではないけど……」

「また曖昧ね。嫌いではないけど好きでもないのかしい」

「好きつていうと、何か違う気がするんだよなあ。好きは好きだと思つけど……。あ、マザロンだとそういうたるものではないよ」

「わかるわよ」

「好きつて言葉でなくて、もっと別の言葉があつそつだけど……。ほら、家族つてそつじやないかな」

「やうね。言いたい」とはわかる。それなら、田代くんはコキのことを好きかしい」

「そりや、好きなんじゃないのかな。付き合つているんだし」

「じゃあ、コキと田代くんがずっとこのまま、結婚したらどうかしき」

「それでも好きだと思つよ。結婚は好きだからするものじゃないのかい」

「でも、結婚すると家族になるでしょ。そうすると、川上くんがお母さんに思つてこまるような気持ちになっちゃって、好きではなく

なるんじゅないかしづ」「

「やうかな。いや、違つたじゅないかな。やっぱり好きは好きだと  
思ひたゞい……」

「どひして違ひの。どひして家族でも好きなの。川上くんは好きつ  
て言葉ではないんでしょ？」「

「おれも結婚していないからわからないけど、親子と夫婦は違つと  
思つむ」「

「じゃあ、夫婦なら好きつて言葉でもここのね」

「おやらぐはね」

「ちょっと曖昧ね。わたしもやつと思ひたゞい」

「それなら聞かないでくれよ」

「確認をしたかったの」

「何の確認だい」

「大したことじゅないこの。ほら、近くにいても、ともだちでも、考  
えていることはわからぬでしょ？」

「だから今日はいろいろと聞くのかい」

「そういうわけじゅないけど……。川上くんだってわたしの頭の中  
なんてわからないよね」

「うん、まったくわからないね」

「まったくわからぬこの。少しくらいこはわかるんじゅないのかしら  
「え。わからないよねつて言つておこしてそれかい。そうだな。少し  
くらこならわかりそุดだな」

「それなら今わたしが何を考えているかわかるかしら」「

「今かい。どこの居酒屋に行くか、何時頃に行くか、もつ一一杯ロー  
ヒーを飲むか、といったところかな」

「それは川上くんが考えてこる」とでしょ？」「

「よくわかつたね」

「今はともだちじゅなくてもわかりそつよ。やつね。ヒントまし  
これまでの会話ね」「

「地球だの宇宙だのも含めてかい

「ええ、全部」

「本当に少しわかりそうだったんだけど、今のヒントで急にわからなくなつたよ」

「じゃあ、最初に思つたことは何かしら」

「……いや、ちょっと言つづらこな」

「三上くんは勇氣があるかしら」

「どうだらう。時と場合によるから何とも言へないな」

「曖昧ね。言いたいことがあるのに言つづらこ。聞きたことしがあるのに聞きづらこ。やりたことしがあるのにやつづらこ。やうこつた時にはどう。勇氣を持つて行動できるかしら」

「ああ、それなら勇氣がないかもしれないな」

「即答ね。思い当たるしがあるのかしら」

「ちょっとね」

「わたしもやつよ。……でも今日は少し勇氣が出せたと思つわ」

「そう……。それなら良かつた」

「わたしも曖昧だけ三上くんも曖昧よね。わたしは曖昧つてやさしこつてことだと思つうの。それは他人にやさしい時もあるけど、主に自分にやさしいものよ。失敗をしないように安全などこのこころためのもの。悪いことだとは思わないわ。その方がうまくいくことだつて多々でしょ。勇氣がないことの言い訳かもしれないけど……」

「やうだね。勇氣がなくて曖昧でも伝わることもあるだらうし。今日の矢島さんは曖昧といつうか、迷走してくるやつだつたけどね」「でももやつづいたんでしょ」

「ああ……。おそらくは」

「曖昧じやない方がいいかしら。やうした方がいいと感づ」

「無理に言つてくれなくてもいいよ」

「……やつづいたことは言わないでくれつていとかしら」

「やうじやないよ。矢島さんがおれの考えてこいる通りのことを思つてこゐのなら、おれも同じことを思つてこるかい」

「 遊味ね

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8286y/>

---

曖昧問答

2011年11月24日19時01分発行